

健康文化

## 本物の目アクリルの目

高田 健三

人間の目とは厄介なモノで、子供の時からでも近視や乱視になったりすると、視力の補助器具としてメガネと言う厄介なモノを使わなくてはならなくなる。メガネは十四世紀始め頃から、ヨーロッパで使用されていたと言うが、日本には十六世紀中頃伝来したらしい。何れにしても、それ以前の人たちは、視力が衰えたらどうして居たのだろうか。

私がメガネを使用し始めたのは、六十年程前になる。はじめは近視用のレンズで十分であったが、そのうち乱視が重なり、度々レンズの修正が必要であった。昔のレンズはガラス製だったので、可成りの重量があり、鼻や耳に掛かる負担は辛いものがあった。今日では、素材がプラスチックに替わって、比べものにならないほど使い勝手がよくなっている。コンタクトレンズもプラスチック製になり利便性が良くなった上、使い捨てのものまで現れて、その気になればメガネなど煩わしいものを使わなくても済む時代になった。

コンタクトレンズが使用され始めた頃、家内は知り合いの眼科医の薦めで、ガラス製のコンタクトレンズを使って居たと言うが、メガネも使用していたらしい。今やファッション感覚で使われることも多いメガネは、そのころは女性をきつく見せると言われることもあって、TPO に依って使い分けをしていたようである。

私が独身の頃、恩師の山田教授から、綺麗なお嬢さんを紹介したいけれど、メガネをかけている人はどうですかと、突然尋ねられたことがあった。私自身、メガネを掛けて居たので、特に気にはならなかったが、やはり、メガネをかけた女性は、“何々女史”と言うような感じがするのだろうか、そんな気遣があったのかと思った。その頃、先生はアメリカの研究所からの招聘を受けて転出の準備に忙しく、私も積極的に返事をしたわけでは無かったので、話は立ち消えとなってしまった。しかしメガネを掛けた麗人とはどんな風情の女性なのか、暫くは気になったものである。

“戦後”と呼ばれる混沌の時代を生き抜いてきた身でも、八十も半ばを過ぎると、あちらこちらが綻びてきて、やる気はあってもおいそれと身体が付いて

こなくて、悔しい思いをすることがある。しかし五感のうち、味覚、嗅覚は自分なりに未だ深化していると思っている。聴覚は普通、触覚は基準が判からないので判断できないが、視覚だけは歳には勝てないようである。

数年前から視力が急速に悪くなり出したのか、新しく作ったメガネレンズが1年と持たなくなってきた。私の場合二焦点レンズなので、その都度、作るのにも日にちがかかる上、伴ってそこそこの支出が嵩む。かかりつけのメガネ店で担当のオプティシャンに、検眼データについて尋ねたところ、今以上矯正すると、左右のバランスが悪くなって頭痛の原因にもなるという。一度専門の眼科病院で診てもらって下さいと、店が推奨する眼科宛の紹介状を書いてくれた。たまたま友人も知っている病院だったので、情報もそれなりに持っていた。白内障の懸念もあり、それではと言うことで、同様に視力に悩んでいる家内共々、重い腰を上げて病院を訪ねた。三年前の夏の終わり頃であった。

そこは予想以上に大規模な眼科専門病院で、待合室のドアを開けて驚いたのは、広い待合室が大勢の受診者で埋まって居たことである。それとなく見回してみると、殆どが中高年の人たちである。思いもよらず、高齢者の現実に直面し、社会の中の自分の立ち位置を、改めて思い知らされた。

私が知るところでは、白内障は水晶体の経年変化で、四、五十才頃から次第に濁りが生じて視力が低下する眼病である。濁りの進行を遅らせる点眼薬はあっても、元に戻す薬は無いという。一方、近年になって、濁った水晶体を取り除いて、アクリル製の人工水晶体と入れ替えて、視力を取り戻すと言う高度な手術法が確立されたことは知って居た。病院の資料によると、今や年間二十万人以上の方がこの手術を受けているというのは驚きであった。

その日の病院での精密検査結果は、白内障が或る程度進んでいるので、手術が好ましいとのことであった。しかし手術までの待ち時間が数ヶ月掛かること、今使用しているメガネが何とか用を足していることもあって、生活のスケジュールと手術の日時を調整する必要の為、暫く様子を見ようと言うことにした。ところが光陰矢の如しで、何かと小忙しい日々を費やして居るうちに、1年半が経って了っていた。

目のことも忘れかけていた今年の二月の初め、夜中に寒さを感じて目が覚めた。壁のエアコンに目をやったところ、運転表示の豆ランプが点滅していた。“リセット”サインである。ところが何と、それが EU の旗印にある星のようにリング状に並んでいるのである。驚いて目を擦ってよく見ると、左目では一点に、右目では“星のリング”に見えるではないか。何時からそうなったのか全く気が付かなかったが、エアコンの“リセット”サインが目の異常を知らせてくれ

たのである。そう言えば近頃、車を運転していて、前方にある交通標識が屡々見づらいついことに気づいていた。左目の視力は0.7なのだが、右目の異常が干渉していたのであろう。迂闊過ぎたと反省しきり！

早速に病院を訪ねた。先生は1年半ぶりですねと言いながら、検査結果を診て、可成り白内障が進んだことが原因であるという。今回はすぐに手術することを決め、手術日も五月下旬になった。右目のことは済んだので、左目はどの程度なのか尋ねたところ、視力は十分あるが、白内障はある程度進んでいるので、左右の視力のバランスをよくするためには、左目も今回手術するのも選択肢の一つであるとのこと。自分の歳を考えると、“この先”はそれ程長いとは思わないので、出来たら左目は“本物の目（水晶体）”のままに残して置きたいと気持ちを話したら、先生は頷きながら、手術は何時でも出来るからそうしましょうと言ってくれた。

手術当日は午前中、病室で準備処置などを済ませて、午後の手術を待つだけである。予約を済ませた時に貰った“白内障手術を受けられる方へ”という当病院のパンフレットには、手術の方法等、術前3日から術後1週間ほどのスケジュールが、色つきの画像等を使って要領よく纏められていて、私のように手術なるものを初めて受ける者には、不安感を和らげるのみに役立った。

時間が来て手術が始まると、以後は何の痛みも感じず、今はどの辺かなどと思っているうち終わってしまった。準備室から入って手術室を出るまで30分ほどの短さである。白目の部分（結膜）を切開し、そこから細い針を差し込んで、水晶体囊の中の病変した水晶体を超音波で砕き、吸引除去する。その跡に直径5-6ミリのアクリル製のレンズを差し込み、結膜の切り口を熱凝固して閉じると言うのが手順のあらましである。総てがミリ単位の精密手術である。使用する機器の精密さもさることながら、その手術をわずか15分程でこなす先生の手練の技は、驚嘆という他はない。

病室に戻り点滴を済ませて目の麻酔が覚めた頃、サロンで夕食を摂った。その日に手術を受け一晩入院する患者の方々である。大きな眼帯をしているせいか、みんな神妙な顔つきに見えた。同席の人は、明日、もう一方の目も手術すること、和やかな雰囲気の話が出来たのも、今日の手術の経験が気持ちを楽にさせているのだろうと思った。

翌朝、術後の検診と視力などの検査を受けた時、右目の視力が0.7になっていたのには驚いた。先生は目を追う毎によく0.9ぐらいに落ち着くでしょうとのこと。今後のスケジュールを聴いた後、昼前の退院である。勿論、眼帯はしたままであるが、病院を出て街の景色を見た途端、何となく張りつめていた緊

張が一度に弾けた。家に帰って鏡で見ると、白目の切開口とその付近に少し血が滲んでいる程度であった。3日後の検診で眼帯がとれ、“自分の顔”に戻った。試しに周囲を見回すと総てが明るく見えた。テレビ画面の“白”は眩しいほどである。それからしばらくの間、洗髪や洗顔のとき、雑菌の汚染予防の為、頭上から湯や水を浴びることを禁じられて居たが、1ヶ月後総ての禁止事項が解けて、やっと“普段の顔”に戻った。

そんな或る日の梅雨の晴れ間、新処方メガネレンズも出来上がったので、久しぶりに二階のベランダに出て、起伏に富む八事の景色を眺めていた。空は碧く、遠目に浮かぶ雲は白く輝いていて見えた。その下には、昔の面影を残す森の木々、間を埋めるように建つとりどりの家の輪郭がクリアに見えた。試しに右の目（アクリルレンズ）だけで見ると碧、白、青、赤などがよりシャープに映るのに対して、左の目（本物の水晶体）だけで見ると、視野全体が淡い琥珀色のフィルムを通したような色彩に変わるのである。これが“白内障の世界”だと実感した。いつ頃からは判らないが、時と共に私は“穏やかな暖色系の世界”に遷り住んで来たことになる。アクリルの目はそんな私を、色彩過剰とも言える現実の世界に連れ出したことになる。しかし私には、両目で見る時、両者の色調が程よくバランスしていて心地良く思えた。

手術を片目だけにしたことによって、面白い経験をする事になった。或る画廊に立ち寄った時のことである。いくつかの絵を見ている時、何気なく、左右片目ずつで眺めてみると、同じ絵が違った雰囲気に見えるのである。左目に写る映像の色調は、白内障による干渉の結果なのである。そこで或る好奇心が涌いた。高齢になっても終世傑作を画き続けた画家は少なくない。巨匠、大家と言われる人達も、晩年に向かうに従い多かれ少なかれ、白内障は避けられなかったであろう。であるとすると、それが作品の上にどんな影響を与えたであろうかと、大いに興味をそそられるのである。(2010、7)

(名古屋大学名誉教授)